04/10/14

開会趣旨
「記述の決定不可能性について」

野呂　康
（本学言語教育センター准教授）

あいさつ

本日は，多分に専門的な議論の場であるにも関わらず，沢山の方にご臨席いただき嬉しく思います．本シンポジウムは岡山大学言語教育センターの中でも，特に英語と日本語以外の外国語教育に携わる初修外国語系が特別公開講座という枠組みで企画し，文学部の共催という形で実現したものです．まずは，企画から本日の開催に至るまで御尽力いただきました先生方に御礼申し上げます．

シンポジウム題名について

開催趣旨として，本日の題名についてご説明申し上げます．

この「嘘から出る真実」というのは，もちろん「嘘から出た誠（真）」ということわざを下敷きにしております．しかし，メモワールという文学から歴史を抽出しようとした嶋中氏の仕事を単純化し，文学を嘘の側に，歴史を真実の側に置こうとしたわけではありません．一般に文学研究は虚構を，歴史は事実を扱うものとされています．確かに詩にせよ小説にせよ，文学とはまずもってフィクションであるとわれわれは認識しています．フィクションという語はラテン語のfictio「作る行為」を語源としますが，この語には「偽る，見せかける行為とその結果」という意味もありました．ここから，中世のラテン語では「騙すこと，偽り」という意味もでてくるのです．つまりこの語には常に作り事，嘘というネガティヴなイメージがつきまうのも事実です．

これに対して，歴史という語は事実，真実，本当のことに分類されます．したがって，本シンポジウムの題名から，文学というのは作り事でそのまま受け入れてはいけないものなのに，ひょうたんから駒で，そうした嘘の表現からも偶然に真実としての歴史が導きだされると想像されたかもしれません．しかし，そうではありません．一つ例を挙げてみましょう．

「私は今朝，目玉焼きを食べてきました．」非常に卑近な例で恐縮ですが，この会場にいる方で，この私の発言を嘘だと否定できる方，逆に真実だと断言できる方はいらっしゃいません．私の朝食に立ち会うか，私と朝食を伴にした同居人からの証言を得るか，あるいは胃カメラでも用いておなかの内容物を調べるか，そのような手続きを経て初めて，言葉の真偽をはかることができます．つまり言葉というものは，それ自体では決して真偽を判断することができないし，いわんや目玉焼きの実在を保証したりはしません．事実や実在を確信するためには，状況証拠や証言，資料に頼らざるをえないのです．ここで私が皆さんを騙そうと意図するなら，この発話は嘘ということになりますし，騙すつもりではなく，単に卵焼きを目玉焼きと言ってしまったというなら，勘違いや思い違いとなります．いずれにせよ，私が身振り手振りで否定したりしながら発言するのでなければ，事実の確認ができないのです．発話に伴う状況証拠の痕跡を伴わない文字表現であれば，なおさら判断は難しい．これは残念ながら，歴史を含むありとあらゆる記述に共通の根本的な特性なのです．

小説や物語の中で，左の耳から生まれて「酒が呑みたーい」と叫ぶ巨人が出てきても，誰もその存在を信じないでしょうが，日記や手紙，歴史と銘打たれていれば記述をそのまま受け入れてしまいかねない．私たちは経験や知識に照らして，目前の出来事を解釈し判断します．これはどこどこに書かれていたから正しいとか，これは誰々が言うのだから信ずるに足るというわけです．何を根拠に据えるにせよ，咄嗟に解釈を介して判断を下し，物事を信じます．本シンポジウムの題名を「嘘から出た真」という過去形ではなく，敢えて「出る」という現在形に変えたのは，その時々の判断者の解釈を介してしか，信ずる行

為が発生しない，言い換えるなら，解釈行為による保証があれば，そこに真実が生まれるのです．文学，歴史を問わず，記述は嘘をつきます．嘘かどうかを判断し真実を見いだすのは，したがって読み手の解釈作業に他ならないのです．以上が，本日の議論の前提となる考え方となります．

発表者について

本日は著者に直接お話いただくだけでなく，本学の岡本先生，そしてフランス史の阿河先生にコメンテーターを御願いしました．両先生に関しては後ほどご紹介いたしますが，本日のテーマは必ずしも御専門と一致するものではありません．しかし私には，両先生以外に御願いするつもりはありませんでした．それはまず，内外の研究の動向に通じた歴史家が，文学を一次史料とする歴史記述の試みと，先人の残した歴史記述を文学と捉え直した分析にどのように反応されるか，私自身知りたかったからです．次いで，さまざまな神話やイメージに仮託して「新しい哲学」を紡ごうとした思想家ジョルダーノ・ブルーノを読みこなし，その思想史上の意味を抽出された思想史家が，真実とも虚構とも判断のつかないテクストの分析をどのように読まれるのか，興味があったからです．

学問世界はよくたこつぼに喩えられますが，各研究者が専門分野に囚われず，他者の方法や問題意識を理解する事で，刺激と新たな方法論が生まれます．新たな方法論が生まれれば，そこに新しい学問が創造されます．それゆえに，現在に投げ込まれた嶋中氏の著作を出発点として，新たな学問のあり方を探りたいと言うのが，本シンポジウムの目論見であり，野心なのです．

発表へ

それでは開催主旨の説明が長くなりましたが，これから発表に移らせていただきます．

まずは本シンポジウムの副題にも掲げました『太陽王時代のメモワール作者たち　政治・文学・歴史記述』の著者である嶋中博章氏に御登壇願おうと思います．

司会として

発表者紹介

嶋中博章

嶋中氏は本書のカバーにも記されていますが，1976年北海道苫小牧で生まれ，奈良大学を卒業後，関西大学を経て，関西大学の博士課程を修了し，現在は複数の教育機関で非常勤講師をされています．本日お越しいただいている阿河先生との共訳書の他，主にフランス史に関する翻訳，論考を精力的に発表されています．それでは嶋中先生，よろしく御願いします．

岡本源太

岡本先生は今日も会場にいらしていただいております，本学の山口信夫先生の御謦咳に接した後，京都大学で博士号を取得され，非常勤を経て，本学の准教授となられました．御専門は美学・ルネサンス思想史で，多くの論考や翻訳がおありですが，特に博士論文を基にした御著書『ジョルダーノ・ブルーノの哲学　生の多様性へ』で，＜近代＞の思想家としてのブルーノの思考を見事に跡づけられました．それでは岡本先生，よろしく御願いします．

阿河雄二郎

阿河先生は既にご紹介申し上げるまでもない著名なフランス史家でいらっしゃいます．御論考は数知れず，とりわけ私のような文学専門の人間がフランス史について知識を得ようとした場合，例外無く参照するのが山川出版社の『世界歴史大系　フランス史』で，その17世紀前半に該当する「絶対王政成立期のフランス」の執筆者でいらっしゃいます．先生のご関心は多岐に渡り，私などは17世紀後半の一連の貴族研究をよく参照させていただいているわけですが，最近では本日の講演者である嶋中氏を共訳者として『真実のルイ14世』や『幻想のジャンヌ・ダルク　中世の想像力と社会』などを発表されています．それでは阿河先生，よろしく御願いします．